

資料 G2・伊豆沼干拓史

宮城県・若柳町中央公民館が、作成したスライド構成の「伊豆沼干拓」を若柳町中央公民館の了解を得て、若柳ロータリークラブが伊豆沼内沼環境教育教材の一部として CD ROM 版を作成した。

- 1) 水田地帯に広がる大きな沼、「伊豆沼」
- 2) そこには、魚が泳ぎ、草花が咲き乱れ、鳥たちが飛び交い、様々な生き物が生息しています。
- 3) この大自然に満ちた伊豆沼も、昔はもっと広い沼でした。しかし、長い歴史の中で、干拓によって水田になったところもあるのです。では伊豆沼の姿は、どのように変わってきたのでしょうか。
- 4) 「伊豆沼干拓」(タイトル)
- 5) 伊豆沼は、宮城県の北部、若柳町・築館町・迫町にまたがる、県内で最も大きい沼です。
- 6) 現在、周囲が 11.9km、湖水面積 2.89km²あり、低地にある淡水湖としては、東北地方で青森県の小川原湖に次ぐ大きさを誇っています。
- 7) 内陸にありながらも寒暖の少ない温暖な気候に恵まれ、ハスをはじめとする水性植物や
- 8) 鳥類・両生類・昆虫類など多種多様な生物の生息地にもなっており、
- 9) 冬にはガンやカモ、ハクチョウなど渡り鳥の飛来地として日本一を誇っています。
- 10) このように多くの動・植物が生息できるのは、沼の深さが約 1.5m と浅く、流れがほとんどないことと、
- 11) それを囲むヨシ・堤防・水田・田畑・丘陵などの環境が、お互いに複雑につながり合っているからと考えられています。
- 12) この付近の貝塚の分布から、かつては海であったと考えられ、また、縄文時代や弥生時代の遺跡が発見されていることから、古くから人々が住みついていたと言われています。ではこの伊豆沼はどのようにしてできたのでしょうか。
- 13) この地方も、大昔は海の入江でした。縄文時代初期になってからも海辺で、現在のような地形

が形成されてからも低湿地帯として残っていたと考えられます。

- 14) 更に、栗駒山を源流とする一迫川・二迫川・三迫川の3つの川が合流した迫川が、中流部の低地に入ってから流速を緩め、長い間に低湿地帯に土砂を積み重ねて、自然堤防を作っていました。
- 15) そこにだんだん水が滞って後背湿地といわれる排水不良の低地ができ、次第に沼になっていったといわれています。
- 16) このようにしてできた湖沼は「低地湖沼」と呼ばれ、伊豆沼のほかにも内沼・長沼・船越沼・杭が浦沼など大小たくさんあり、伊豆沼付近は低湿地が広がる一大湖沼群でした。
- 17) 伊豆沼は、古くは「大沼」と言われ、周囲が約 2.9km、面積が約 4.2km²あり、その周囲一帯は、藩政時代初期までは「野谷地」として放置されていました。
- 18) ただ、周囲の村々が「入会(いりあい)」という特定の権利を持って、草やヨシ・カヤなどを馬の餌や田畑の刈敷用に刈り取る程度しか利用されていなかったと言われています。
- 19) 室町時代や戦国時代、武士は農業をしながらの武士だったので、丘陵の根岸や河岸の自然堤防しか開墾されておらず、それ程多くの土地は持っていませんでした。
- 20) 仙台藩で開墾が盛んに行われたのは、関ヶ原の戦いの後、約 70 年間の正宗・忠宗の時代で、米穀の増収を図るための積極的な財政制作として、新田開発など原野開墾が、また、沼や沢の干拓が行われていったそうです。
- 21) 特に開墾が盛んだったのは、二代藩主・忠宗のころで、仙台藩の禄高 62 万石と明らかになったのも忠宗の時代です。
- 22) また、忠宗の開墾奨励の一因と思われるものに、1637年(寛永14年)の大水害があり、6月23日から4日間降り続いた大雨により、その被害が仙台領全体に及んだそうです。
- 23) その復旧のために、幕府から銀 5,000 貫

- を借用したことが、いやが上にも忠宗の開墾熱をあおったと言われています。
- 24) また、開墾は、米穀の増収を図るほかに、家中の武士及び百姓の二・三男対策であったとも言われています。
- 25) 伊豆沼の周辺地域が開墾されるようになったのも、二代藩主・忠宗のころです。
- 26) 1643年(寛永20年)にできた伊豆野堰や、1651年(慶安4年)にできた板倉堰によって迫川流域の開墾が進み、
- 27) 1681年(天和元年)には、岩出山三代城主・伊達弾正敏親によって若柳の南部・新田地区の開墾が行われました。この地区は、部落を水害から守るために周りを堤防で囲んだ「輪中部落」で、「弾正新田」と言われています。
- 28) 更に、1685年(貞享2年)には、仙台藩により三方島に約1.8kmに及ぶ迫川の堤防が築かれ、同時に従来の荒川堀の水路を変更して、現在の位置に幅と深さを拡げた荒川新堀が掘られました。
- 29) このことによって、伊豆沼の水を迫川に流して水位を下げることができ、伊豆沼周辺の野谷地が水田に開墾されていったそうです。
- 30) このように、藩政治代の開墾は、用水堀を掘り、迫川に堤防を築くことによって北部の方から次第に南下するとともに、東部から西部へと進められていき、伊豆沼周辺の開墾可能な地域が次々と水田になっていったのでした。
- 31) しかし、これ以降の藩政時代には大きな開墾は行われず、さらにその続きの広大な湿地である伊豆沼沿岸は、干拓の願いが出され計画もされたのですが実現したものはなく、ほとんど大正・昭和の年代に持ち越されて行きました。
- 32) 記録によると、1733年(享帆18年)畑岡村肝入・佐助が伊豆沼周辺を干拓すること、さらに、沼周辺の村を水害から救うために、沼の水を排水する堰を掘り開くことを大肝入に願い出しました。
- 33) また1760年(宝暦10年)には近年引き続く日照りで伊豆沼が干上がってきたため、伊豆沼周辺の村々から干拓することの願いが出され
- ました。
- 34) しかし、これらは、下流の登米郡南方村・北方村などの農民が、干拓によって遊水池としての面積が狭められ、村々への水害増大を懸念し反対したため、ほとんど手が付けられなかったそうです。
- 35) 低湿地を開墾して造成された伊豆沼周辺の水田は、常に水害の危険にさらされていました。
- 36) 特に、迫川の水位が高くなると、ふだんは沼の水を排水する荒川が、反対に迫川の水を沼に運ぶ水路になってしまうからでした。
- 37) そこで、逆流を防ぐため、北方村泥内に水門を設け、1796年(寛政8年)に現在の仮屋に移されました。
- 38) 明治9年、26年には若柳町他5ヶ村組合によって造り替えられ、大正2年には現在のコンクリート水門に造り替えられました。
- 39) この水門によって、一応迫川の逆流を防ぐことはできたのですが、大雨のときは、上流の落堀やその他大小の堀からの水が伊豆沼に集まるため、依然として耕地は水害の惨事を免れることはできませんでした。
- 40) そこで、昭和2年に若柳町・畑岡村・志波姫・玉沢村・北方村・新田村の1町5ヶ村によって「伊豆沼沿岸耕地整理組合」が設立され、湖岸干拓工事が行われることになりました。
- 41) この工事は、昭和2年より10ヶ年で県営工事と組合工事の双方によって行われ、総工費1,779,671円を費やして、用水路の整備や排水機場を設置するとともに、1,458町歩の耕地を整理し、更に国有の沼地33町歩が干拓されました。
- 42) これらは、この組合の中の区ごとの耕地整理組合によって工事が進められたのですが、赤い部分は畑岡村4代村長・二階堂惣左衛門が、自分のお金で開墾したものです。
- 43) 特に、この組合の工事は、従来の自然排水に対し電力を利用した機械排水の設備を配置したことが特徴で、自然排水ではどうにもできなかった伊豆沼周辺の土地改良を大きく前進させた

- 言われており、実質的に伊豆沼干拓を推進したのはこの耕地整理組合の湖岸干拓工事と言われています。
- 44) その後、昭和8年、湖岸干拓工事完了とともに伊豆沼沿岸耕地整理組合が、伊豆沼干拓を願い出て、14年に工事が許可されました。しかし一方では、13年に周辺3ヶ村の農民500名が、伊豆沼干拓耕作同盟会を結成し、国会へ国営干拓の誓願書を提出して採択されました。また伊豆沼国営干拓期成同盟会も国営干拓の運動を進めたため、耕地整理組合の工事は実施までは至らなかったそうです。
- 45) そのころ、日本では、昭和12年の日中戦争の勃発、昭和16年の太平洋戦争の勃発などにより、日本国中が戦争の渦の中に巻き込まれていき、食糧の増産が急務となっていました。
- 46) さらに、昭和18年、食糧増産を目的とした皇国農村確立・標準農村建設運動が行われ、伊豆沼・長沼の干拓により耕地拡張が時代の要請として再び取り上げられるようになったのです。
- 47) そのような背景の中で、昭和16年に農地開発方が公布され、農地開発営団による国営開発の方式が決定し、永年の懸案であった伊豆沼の干拓が具体化されて入ったのでした。
- 48) かくして工事は、図のように、第一工区から第三工区に分けて、沼の中に堤防を築き、水を排出して整地する締切堤防方式で行われて行きました。
- 49) はじめはトロッコを押して土砂を運び堤防を築いていったのですが、しだいに馬にトロッコを引かせるようになり、さらに機関車を使ってトロッコを引かせたそうです。
- 50) 第一工区は、昭和16年に農地開発営団の発足とともに工事が始められました。しかし、22年に農地開発営団が機関閉鎖したため国営干拓事業となり、23年から宮城県が代行して工事を継続しました。
- 51) そして、23年5月に総事業費2,837千円を費やして90haが干拓され、77.7haの農地が完成しました。その農地は沼周辺の農家250戸に売り渡されました。
- 52) また、第二工区・第三工区は、戦局悪化のため新規事業が全て中止されたために着工されませんでした。そして終戦後の混乱期に、復員や外地からの引き上げ、また軍需工場の閉鎖などによる失業者が続出し、人口の急増による食糧需給が一層窮迫したため、戦前の計画が再び脚光を浴びることになったそうです。
- 53) こうして、畑岡村と新田村にまたがる第二工区は、昭和21年に畑岡村農業会によって緊急開拓委託事業として着手され、23年からは代行干拓事業として、宮城県が工事を継続しました。
- 54) しかし、沼の水量が多くなる夏の時期は南風が強く波が荒かったため、築いた堤防の土が流失してなかなか工事が進まなかったそうです。
- 55) そのような中で、予算の関係で25年から28年まで一旦工事が中止されましたが、やっと29年に総事業費227,171千円を費やして130.2haが干拓され、105.2haの農地が完成しました。その農地は周辺農家672戸にほとんどが配分方式で売り渡されました。
- 56) この第二工区において、迫町と若柳町との間に伊豆沼公有水面における境界争いがあったそうです。
- 57) これは、昭和17年に第二工区の干拓が計画されたとき、畑岡村と新田村において境界協定が行われたのですが、工事中の35年に宮城県が工事計画作成のため若柳町および迫町と協議をした際、境界について両町の意見に食い違いができてきました。
- 58) そのため、36年から県が仲介役となり、両町から特別交渉員6名を選出して交渉や協議が重ねられました。しかし、合意に達しなかったため、両町とも知事に境界裁定を申請し、38年に知事の裁定に両町とも同意して現在の境界が決まったそうです。
- 59) このように、工事が終るころ境界が決まったため、第二工区には1反の田を両町にまたがって耕作しているところもあるのです。
- 60) また第三工区も、昭和22年に新田村によって農地開発緊急開拓委託事業として着手され、23年からは代行干拓事業として宮城県が工事を継続しました。しかし29年に完成予定だったの

ですが、工区が広いために工事が遅れ、

- 6 1) 31年に総事業費101,625千円を費やして117.6haを干拓、93.75ha農地が入植農家を含め172戸の農家に売り渡されました。
- 6 2) このようにして、湖面の約三分の一が干拓されてできた開田は、工事以前からその工区で耕作していた人はもちろん、零細農家の経営規模拡大をもねらいとして、周辺農家に売り渡されたそうです。
- 6 3) また、この工事の特徴として、第二工区・第三工区の堤防に約160mの溢流堤が設けられたことです。
- 6 4) この溢流堤とは、大雨などで伊豆沼の水が溢れるくらいの大水となったときに、既成田を守るため、第二工区・第三工区に水を入れるように締切堤防より約70cm低くした堤防のことです。
- 6 5) 従って、第二工区・第三工区は不完全干拓といわれ、増水の時、遊水池としての機能を果たすところでもあるのです。しかし、その際、国や県からの補償はなく、それが売り渡しの条件だったそうです。
- 6 6) 幸い、いままでそのようなことはなかったものの、昭和55年、56年や61年の大雨のときは、やはり自分の田を守ろうということで、第二工区・第三工区の溢流堤に土嚢を積み上げ、水を越えさせなかったことがあり、下流の荒川堤防の決壊を恐れる地域の人々との間に争いが起きたこともありました。
- 6 7) その事がきっかけとなり、宮城県が堤防の高さを計ったところ、長い間に堤防や溢流堤が沈下していたことがわかり、昭和61年に元の高さに復元する工事が行われました。
- 6 8) このように、藩政時代に初めて計画されてから、実に230年もかかって伊豆沼の部分干拓が完了し、いまの伊豆沼の姿になったのです。
- 6 9) そして、現在は水鳥の楽園と言われるように、自然豊かな伊豆沼として多くの人々に親しまれています。
- 7 0) 昭和56年に、築館町・迫町・若柳町の4,770世帯を対象として実施アンケートによる

と、

伊豆沼のイメ - ジは、鳥類の楽園としてすぐれた自然環境を有しているが、46.6%、また、ガン・カモ類による農作物への被害源が、26%、栗駒山と一体とした観光資源として貴重な地域が、15.1%、そして、農業・漁業などに大きな役割を果たしているが、11.5%などとなっており、

7 1) また、今後どのようにしていくべきかに対しては、積極的に保全して後世に継承していくべきが、44.6%、積極的に利用して行くべきが、26%、そして、現状のままでいくべきが、15.1%などとなっており、自然豊かな伊豆沼に対する地域の大きな期待が感じられます。

7 2) また、昭和42年には国の天然記念物に指定され、昭和60年には、内沼と共に、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約・ラムサ - ル条約」の登録地として指定されました。

このように国の責任においても伊豆沼の自然を守っていくようになり、まさしく、世界の伊豆沼となったのです。

7 3) しかし、水質管理の問題や、沼の水位による水田や動植物への影響など水位管理の問題があり、

7 4) また、観光資源と漁業資源など地域振興における利用と活用の問題、そして、自然とのふれあいから動植物の生態等について学ぶ場とするための保全の問題など、地域住民の生活に深い結び付きのある伊豆沼には、多くの問題があると言われています。

7 5) それら、問題解決のためには、国や県・町そして地域が一体となって、その対策を構じていかなければなりません。

7 6) そのような中で私達にできることは、伊豆沼を汚さない運動、また、ゴミ拾いなど伊豆沼清掃を心がけ進めていくことです。

7 7) 大昔から、さまざまな動植物が生息し、人々の歴史と共に生きてきた伊豆沼。そして今もなお、その素晴らしい自然を残し、これからの私達に大きな夢を抱かせる伊豆沼。

7 8) このように自然保護と活用の両面性をもったこの伊豆沼を、私達は、更に素晴らしい伊豆沼

として、後世に引き継いでいかなければなりません。

79) (終わり)

80) 制作 : 若柳町中央公民館 (二階堂 秀紀)

スライド番号---フィルム上の番号 対応表
(80枚)

1	1 - 1
2	1 - 2
3	1 - 3
4	1 - 4
5	1 - 5
6	1 - 6
7	1 - 7
8	1 - 8
9	1 - 9
10	1 - 10
11	1 - 11
12	1 - 12
13	1 - 13
14	1 - 14
15	1 - 15
16	1 - 16
17	1 - 17
18	1 - 18
19	1 - 19
20	1 - 20
21	1 - 21
22	1 - 22
23	1 - 23
24	1 - 24
25	1 - 25
26	1 - 26
27	1 - 28
	(1 - 27 は不使用)
28	1 - 29
29	1 - 30
30	1 - 31
31	1 - 32
32	1 - 33
33	1 - 34
34	1 - 35
35	1 - 36

高橋 幸弘)
協力 : 写真 ; 川嶋保美・笠原啓一

(昭和62年度全国自作教材コンクール出品作品)

36	1 - E
37	2 - 1A
38	2 - 2A
39	2-3A
40	2-4A
41	2-5A
42	2-6A
43	2-7A
44	2-8A
45	2-9A
46	2-10A
47	2-11A
48	2-12A
49	2-13A
50	2-14A
51	2-15A
52	2-16A
53	2-17A
54	2-18A
55	2-19A
56	2-20A
57	2-21A
58	2-22A
59	2-23A
60	2-24A
61	2-25A
62	2-26A
63	2-27A
64	2-28A
65	2-29A
66	2-30A
67	2-31A
68	2-32A
69	2-33A
70	2-34A
71	2-35A
72	2-36A
73	2-E
74	3-0A
75	3-1A
76	3-2A
77	3-3A
78	3-4A
79	3-5A

